

ふるさとのお話

富士本西の一本杉

大淵・富士本西のヒノキ林の中に、静かにたたずむ大きな一本の杉の木があります。今回はこの一本杉の話を河野政信さん（富士本西・六十六歳）に語っていただきました。



△現在の一本杉



どこからも見えた杉

昭和二十五・六年ごろまで、富士本と鷹岡や杉田（富士宮市）をつなぐ大切な道がありました。私の子供のころでも、人々は馬に米や麦を背負わせ、杉田のすりや（精米所）に行ったり、遠足といえは必ずその道を通るといふ重要な生活道路でした。

その道の目印となったのが、一本杉です。当時の富士本周辺は、畑が多く、道のわきにスツと伸びた一本杉は、大層目立ちました。その姿は富士や吉原の町からも見ることができました。

遠足で聞いた由来

実相寺へ遠足に行った帰りのことです。私たちは一本杉にたどり着くと、木陰で休憩しました。すると、いたずら坊主が一本杉におしっこをしました。それを見ていた先生は「こらっ」と注意し、この木の話をしてくれました。

元気がなくて残念

「昔々のこと、ある夫婦が道に迷ってしまいました。お母さんはおなかに赤ちゃんがいたので、やつとの思いでここまでたどり着きました。ところが急に生まれそうになり、その場で生みましたが、赤ちゃんは既に死んでおり、お母さんも亡くなってしまいました。お父さんは遺体を運ぶこともできず、その場に穴を掘り、手厚く葬りました。そして一本の杉を植えました。それがこの杉だよ。」

現在の杉は高さが約三十メートルありますが、周囲をヒノキに囲まれ、まったく目立ちません。また、雷に木の半分をそがれてしまい、元気がないのが残念です。



河野政信さん

地名の由来

した

みや



△宮下神社付近

宮下村は、江戸時代の初めごろ、古郡氏が加島新田を開発したときには既に成立していた古い村で、村の石高も二百六十石余りあったといえます。

宮下村と呼んだ理由は、必ずしも明らかではありませんが、一説では松岡の水神社の南にある村ですから宮下村と呼んだといえます。宮下村は明治二十二年、他の十五ヶ村とともに合併して加島村をつくりました。

ニイハオ 你好



▷建設中の嘉興賓館 (昨年十二月)

ホテル 嘉興賓館

嘉興賓館は嘉興市人民政府に隣接した嘉興市一のホテルです。友好都市提携が結ばれて、皆さんがもし嘉興市を訪れるとすると、おそらく宿泊されることでしょう。

ことし5月に7階建の宿泊棟が完成し、ぐっと国際的なホテルに変身しました。一般人民の家はレンガづくりで照明器具も十分とはいえない中で、近代的で明るい西洋風の建物です。

外装は薄いグレーで、部屋はほとんどがツイン（2人部屋）です。もちろんバス・トイレ付。フロントやロビーは日本のシティホテルと比べると地味ですが、エレベーター前には世界の時計がつくなど、目は外に向いています。

また、市のお客さんをもてなす応接場的な機能もあります。

ただし、利用できるのは外国人や政府の要人に限られているようで、中国人の多くは同じ嘉興賓館でも従来あった古い建物に宿泊をしています。

こちら編集室

十月五日号のこの欄で「ニイハオ嘉興市にお便りがこない」と書いたところ、早速吉原四丁目の草分敏秋さんから「嘉興市の昔話などを載せたらいかが」との意見を載せたらいかが」との意見に一同「なるほど」ところが、ニイハオ嘉興市はあと一回で終わりとなります。草分さん、お許しを。次の企画に反映させます。